

固有の知識の補強などを行なうえでリターン・マッチにすることになります。こうして実際の調査活動と調査内容や手法に関する再検討や勉強との反復作業を繰り返しながら、私たちは少しづつフィールド調査者としての能力を高め、そして自分の調査を収斂させていきます。ある意味で、フィールド調査のスキルを身につけていくプロセスこそが

ような形で具体的な調査のプロセス、そして調査者としての技術と知恵を修得していくプロセスに触れてもらうこと目的としています。

フィールド調査では大学教員のような肩書きをもっている人と一般の人とはさまざまな意味で扱いが違いますし、学生さんの場合には社会的な常識が欠けている部分もありますから時々、人に話せないような「恥ずかしい」失敗を犯すこともあります。その意味で若手研究者のほうが、自身の経験からフィールド調査の初心者が陥りやすい失敗についての記憶を鮮明にもつていてることでしょう。本連載に登場するのは社会調査のテキストで描かれているような「隙がなく、スマートな」調査者ではなく、「失敗もするし、泥臭い」調査者です。

本連載では調査の最終的な成果物である論文を片手に、それぞれの筆者がフィールドでさまざまな問題に直面しながら、調査を收斂させていく具体的なプロセスを知つてもらいたいと思います。

シカゴ大学のサトルズ教授はフィールドワークに関する授業資料の中で「実際に（フィールドワークを）やってみると前に、フィールドワークに関して書かれた本を読むのにあまり時間を費やさないことである」（カッコ内は筆者

以上のような問題意識から、本連載では人文地理のフィールド調査に関心のある一般の方や学生さんなどを対象として、若手の研究者の方に原則として活字になった1作目の論文を書いた頃の調査経験をつづってもらう、いうなれば卒論を書く学生さんが身近な院生に調査当時の話を聞く

〔注〕  
(1) このようなスタイルのテキストが多い原因是フィールド調査では予測不能で連に左右される要素が多いめであるといえます。それゆえにプロの調査者はさまざまな事態が起ることを予測して、事前にさまざまな準備をします。  
(2) 佐藤郁哉『フィールドワークの技法――問い合わせ育てる、仮説をきたえる』(新曜社) iv頁  
(3) 前掲(2) 6頁

### ◎文献紹介

・佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法――問い合わせ育てる、仮説をきたえる』(新曜社)

本書は暴走族や現代演劇の研究で知られる社会学者が書いた「フィールドワークの教科書」です。しかし、「フィールドワークのフィールドワーク」という同書のカバーが示すように、著者のフィールド調査の足跡を、当時思つたことや失敗談を交えつつたどった「読み物」でもあり、本格的なフィールド調査の舞台裏を覗くことができます。本書の巻末にはフィールド調査に関する文献ガイドが設けられ、著者による短い解説がなされています。こちらも非常に有用です。